

# 地域のことも、防災のことも

洞爺湖有珠火山マイスターのみなさんに聞きました

## 自分事化のヒントを探しに

温泉においしい食べ物、変化のある美しい景色：2008年には主要国首脳会議（サミット）の会場に選ばれ、年間200万人もの人々が観光に訪れる洞爺湖一帯は、過去、20年から50年間隔で噴火を繰り返してきた活火山で、最近では2000年に噴火し、観光業へのダメージはもちろん、地域に大きな影響を及ぼしました。

国内外から研究者が集まるこの地域では、明治のころから研究者と地元の人々の交流があり、1943年末の地震に始まり、1944年に噴火を繰り返した「昭和火山」誕生の際には、麦畑が隆起し、火山として成長していく様子を地元の郵便局長である三松正夫氏がつぶさに記録し、それは、「ミマツダイヤグラム」として世界で高

く評価されました。さらに同氏は、昭和火山自体を貴重な火山標本として保全する必要があると考え、私財を投げ打ち、昭和火山一帯を購入し、活火山の所有者になったのでした（※）。

日本で初めて「世界ジオパーク」に登録されたこの一帯では、今、70人以上の「洞爺湖有珠火山マイスター」が、火山のこと、地域のことを人々に伝え、災害を伝承し、人々に災害リスクの自分事化と備えを促しています。

しかしなぜ、多くの人々がかなり厳しいとされる審査をパスして火山マイスターとなり、活動が盛り上がるのか？ その秘訣を探り、NIPPON防災資産の重要なテーマである災害リスクの自分事化のヒントを得るべく、活動をコーディネートしている川南恵美子さんを中心にお話を伺いました。

※三松三朗「火山誕生を見守り続けた郵便局長 三松正夫記念館」  
地質ニュース597号（2004年5月）参照

### NPO法人洞爺湖有珠火山マイスターネットワーク

かわみなみ えみこ  
理事・事務局長 川南 恵美子さん

北海道深川市出身の旅館経営者。旅館は現在休業中で、再開は「風呂敷方式」とし、パッと開設し、噴火がきたらサッとたためるものと考えているとのこと。火山マイスターとしてのご自身の活動もさることながら、各マイスターのコーディネーターとしての役割を担っている（ノートにはそれぞれの火山マイスターの予定がびっしり書き込まれ、そこでも、自分じゃない人のことを想っている様子）。「人類は、火山の近くで焼け落ちた鳥を食べたら美味しかったことから、火を知り活用するようになった」と思っているらしい。

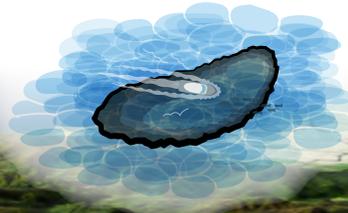
① 三松正夫記念館  
(昭和火山)



② 静かな中島  
(長沼さんの推しの場所)



③ 島になれなかった島  
(川南さん推しの洞爺湖の不思議な地形)



④ 壮瞥町のフルーツ、シードル  
(川南さん推しの食べ物)



支笏湖



⑤ 噴火湾のホタテ  
(長沼さん推しの食べ物)

洞爺湖有珠火山周辺はこんなところ

Source: Vector, Airbus DS, USGS, NGA, NASA, CGIAR, GEBCO, N Robinson, NCEAS, NLS, OS, NMA, Geodatasystems and the GIS User Community, Esri, Vector, Earthstar Geographics, and the GIS User Community

洞爺湖有珠火山マイスター  
ネットワークHP



— 今日ありがとうございます！ここでは、有珠火山の噴火という、住民の皆さんにとって切実な災害リスクを伝え、準備を促していく役割を多くの火山マイスターの方々が担われていますが、まず、どうして火山マイスターの制度ができたのか、川南さんが火山マイスターになった経緯も含めて教えていただけますか？

## 命を守ること

**知見や人のつながりを継承するために**  
川：私の夫の家は、温泉旅館を経営してきたのですが、2000年に有珠山が噴火したとき、私は深川市の実家に避難してました。それから数か月たって、家に戻って源泉掛け流しのお湯に入ったら、これはすごいと思ったんです。温泉はいい！と。日本中で温泉ブームだったのですが、ここに温泉があるというのは、火山があるということ、その時、日本が火山国であることをはっきり認識したんです。この事実を日本人はもっと知るべきだと。

それから数年して、旅館の常連さんだった北海道大学で有珠火山を研究している岡田弘先生(※)が、「今度、火山マイスター制度というものを始めるんだよ」とおっしゃったんです。2000年の噴火時の気持ちをお手伝いしたいと思えました。

以前、昭和新山に初めて登ったとき、三松正夫さん、三松三朗さんが行ってきたこ

※北海道大学名誉教授、洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会学識顧問

とを知り、それが衝撃的で、噴火のせいで商売ができずお金が入ってこないとか、火山は困ると思っていた自分は一体何だったんだ？と少し恥ずかしくなっていたこともあり、これはやらねば！と思いました。

火山マイスター制度は、有珠山の観測を続け地元の人々と関係を築いてきた岡田先生、火山防災を担う北海道庁、そして、昭和新山の所有者である三松三朗さんたちが、自分たちが年齢を重ねていく中で、今後、自分たちが蓄積してきた知見や地域の人のつながりをどう維持していけるか、それらを考える中で発案されたものです。火山のことをよく知っていて、周囲の人に伝えることができる、職人のようなイメージで「マイスター」になったようです。最初は、火山親方とか、そういう案もあったようですが、マイスターに落ち着きました。この制度は2008年に始まったのですが、当の発案者たちが、「こんなに続くと思わなかった」とびっくりしています。

## 地域の魅力も災害の記憶も

川：活動の一つに火山ガイドがあります。小学校から大人、中高校まで、どこかのルートを歩きたいという依頼が入ると、火山マイスターが出動していくわけです。私も、年間何本も受け持っています。そこで火山の話をしたり、ロープウェイの中で案内もしています。その他にも、私は、1年前から室蘭工業大学で「胆振学入門」という地域のことを学ぶ授業を年2回受け持っています。

ます。講義では、ジオパークのことや火山マイスターの活動などについてお話するのですが、最初は8人くらいでした。しかし、今では150人くらい入る大きい教室になっています。また、講演や、テレビやラジオへの出演もあります。かなりの「無茶ぶり」がいろいろなところからやってくるのですが(笑)、悲鳴を上げながらもこなしている感じですね。

ガイドの依頼は教育現場からが多く、あとは町内会の旅行のようなものや、視察対応もあります。どこかで大きな災害が発生した後は出動が増えますね。地域では、保育園でも有珠山学習を行っています。その子たちに話をし続けることが、将来の火山マイスター育成につながってくればいいなと思いますね。



災害のリスク、命を守ることを伝える  
写真提供：洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会

2000年の噴火を経験している住民が多くいることが、噴火による災害を自分事として捉えやすいとお話もあった。



1910年



1944-45年



1977-78年



2000年

写真提供：洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会

— 災害のことだけではなく、地域の魅力もあわせて伝えていくんですね。火山マイスターの人数も多ければ、活動内容も幅広くありますが、その中でも、川南さんが特に大事にしていることはありますか？

活火山を買ってしまったおじいちゃん

川：子どもたちに話をするときには、どうやったら自分に引き寄せて考えてもらえるかを常に考えています。麦畑が盛り上がり過ぎてきた昭和西山を買ったのは地元郵便局長さんなんですという話を子どもたちにすると、ああそうですかという反応なのですが、そこでこう話すんです。「ところで、もし、君たちのおじいちゃんが会社から帰ってきて、"ただいま、おじいちゃん、〇〇ちゃんに車も買ってあげたい"と思っし、留学もさせたいと思っただけであきらめてくれ。お金、活火山買うのに全部使っちゃったんだ！」と言われたらどうする？」と。子どもたちは「うー！」となって、「賛成！」という子もいれば、「困る困る絶対反対！」という子もいて場が沸くんですよ。それから、「戦争末期の物が無い時代に、世の中のため、子孫のため、自分じゃない人たちのために大きな決断ができるってすごいことだよ」と話すと、みんな真顔で、すごいねという顔になって帰っていきます。

— 引き込まれますね。大人でもそれは考えさせられます。自分がその立場に立つかは別として、想像してみること、考えてみることでぐっと災害のことや他者のことが身近に感じられますね。

必ず持ち帰ってもらうもの

川：これは、自分事として感じてもらうための例ですが、私が一番伝えたいこととしては、こんな話をします。「あなたたちね、自分ちの近くに活火山がなくてよかったと思ってるでしょ。でも油断しちゃダメだよ。地球というのは、どこに行っても災害がある。もし街中で、地下鉄に乗っている時に大きな地震が起きて被災したら、誰かがあるなを守ってくれるのではなくて、自分が自分の身を守るしかない。その時、身を守る人になってほしい。山の高さとか、何年に噴火したとかは忘れてもいいけど、自分の身を守るのは自分で、命の瀬戸際にあつて、何を選択するかは自分にかかっていることをこれから先も覚えておいてほしい」。私が何を持ち帰ってほしいかというのと、やはり、命を守ってほしいということなのです。

— 大原則はやはりそこですね。ここまでのお話は次世代向けが中心でしたが、全般に大切にされていることはありますか？

## 景色の向こうにある物語

すごいものを見た！

川：これは火山マイスターになる前からですが、バスに乗り遅れた人を、旅館から昭和西山に送っていくことがありました。ロープウェイのところまで降りて、山を観光して帰ってきた人は、いわば普通に「綺麗だった」「面白かった」と言って帰ってきます。でも、まず三松正夫記念館に行ってもらって、それから観光して帰ってきた人は全然違うことを言うんです。「すごいものを見た！」と。つまり、昭和西山の成り立ちや、三松さんが行ったことなど、背景にあるものを知ってから観光した人が、これほどまでに価値観が変わるのかと： 自分の中で、言葉として整理できていたわけではないのですが、それは肌ですごく感じていたんです。景色の向こう側にある物語がこんなに面白いものだったのか、ということですよ。ここは今、ジオパークに認定されていますが、それもそういうことで、人の知識欲だったり、いろいろ感動に関わる大切な情報を与えるものです。

— 温泉のお話もそうでしたが、そういったストーリーに触れることで感動が深まる、楽しいことをみんなに知ってほしいという動機を感じます。今は70人以上の方々が火山マイスターになっていますが、皆さん、そういう動機をお持ちなのでしょうか？



洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会  
事務局次長

室長 加賀谷 にれさん

洞爺湖町職員。美術大学卒の経歴も活かし、ジオパークを推進する中で、人々にその意義や魅力を発信する素敵なコンテンツを丁寧にプロデュースしている。中東で開発協力を携わった経験もある。



洞爺湖有珠火山マイスター

長沼 啓一 さん

開発コンサルタントとしてケニアに18年暮らした後、移住してきた洞爺湖町で火山マイスターになったばかりの方。今回、突然のインタビューにもかかわらず落ち着いた語り口で解説いただいた。

## 意気に感じた人たち

川：現在、72名の火山マイスターがいますが、それぞれの経歴や動機は多様です。この制度がはじまってから、それを意気に感じた人たちが集まってきて、さらにそれを見て何かを感じた人たちが加わって多彩なメンバーになりました。この土地で生きていくのに、火山の被害者になるばかりじゃなくて、楽しんで生きたいんじゃないかという感じでメンバーが増えていった感じがします。

ちよūd、新しく火山マイスターになったばかりの長沼さんが来たので聞いてみましょう。彼は、アフリカに暮らしていた人です。長沼さんー！（本当に飛び入り）

長：こんにちは（笑）。ケニアで18年間暮らしていました。家族が洞爺湖町の出身で、移住してきて6年くらいです。今も一年の半分はアフリカにいて、開発コンサルタントの仕事をしています。

川：半分しかない時間の中で、火山に捧げる決意をしていた（笑）。火山マイスターの審査はなかなか大変ですが、どうして受けようと思ったんですか？

（ここで加賀谷さんが参加）

長：ハハハ。みなさん楽しそうじゃないですか。ここで楽しく、安全に暮らそうと思ったら、

こういう仲間がたくさんいたほうがいいんですよ。ケニアでも、日本人会の役員とか、そういうのは大変なんですけど、人との繋がりができていくと暮らしが安全な感じになっていくんです。洞爺湖町に引越してきて、何かあるかなというときに、「ジオ友」(※)っていいなと思って。その中でも火山マイスターの人たちは、年齢もいろいろですけども、仲良さそうに、いろいろなことに挑戦していて、こういう空間はいいなと思いました。

## 多様で寛容なマイスター集団

川：年齢も経歴もいろいろですけど、火山マイスターの中には、難病で身体が不自由な人もいます。その火山マイスターは、「ユニバーサルデザインチーム」を立ち上げて、車いすの人が、散策路の坂道をどう行けるか考えたりしています。赤ちゃん連れのお母さんにとつて、噴火についてどんな不安があるかヒアリングし、対策を立てようとしている人もいます。昭和新山の持ち主、石が好きで、石が好きではない人、洞爺湖町長になった人、ホタテの秘密を語る人、海岸のゴミ拾いを続けている人、アウトドアガイドの講師、私は山には登りませんが、大学教授になって世界中を飛び回っている人もいますよ。加賀谷さんはご夫婦で、お父様も火山マイスター一期生です。私たちは火山好きだけで集まっているわけではないんですよ。火山マイスターネットワーク代表の阿部さんは学校職員ですが、年間何十日もこの地域の学校で有珠

※洞爺湖有珠山ジオパークに関連して、「NPO法人有珠山周辺地域ジオパーク友の会」が活動している。

山学習を行っている、とうとう内閣総理大臣表彰を受けました。

## コスタリカでも地元でも

長：その大学の先生は、コスタリカで火山マイスター制度をつくってしまいました。最近認定された3人が、明日ここにきて交流プログラムを行います。

川：実は、当初は、火山マイスターの大半は域

外から来た人たちだったので、数年後、ここで生まれ育った地元の人たちが火山マイスターになりました。有珠山にしろ昭和新山にしろ、あまりにも自分の身近にあったから何も感じていなかったそうなんです。でも、火山マイスターになろうと勉強をはじめたとたん、見るものが全く変わってしまったと言っていて、何か変わったなという気がしていました。

——地域に浸透した実感があるんですね。

子どもたちを対象に  
火山ガイドを行う川南さん。



写真提供：洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会

## 自分事化の輪が広がる

地域の文化として

加：私は昭和和山が好きなのですが、この山は世界でここだけのすごい山です。何がすごいかと言ったら、その誕生を目撃した人（三松正夫さん）がいて、それが残っている。しかも、山ができる前の麦畑の状態から山が成長した記録が残っているわけです。その人は、山を丸ごと買い取って、その後を継いだ三朗さん、さらにその息子である靖志さんという人も火山マイスターで、山の主のように案内をしています。火山の成長を記録し、山を買い取った80年前の活動が、昭和和山を柱にこの地域で今でも続いているのです。これは、文化といえるのではないのでしょうか。私たちは、これを「減災文化」と言っていますが、それが噴火に対する意識を高めると同時に、観光を中心として、地域を活性化する素地になっています。ジオパークを世界にアピールしていくうえでも基本的な考え方です。

川：噴火があるからどうしよう、自分が、自分がただけ言っていたら私たちは鳥合の衆です。でもそこに、三松正夫さんの行いがあって、三松三朗さんがそれを継承して、私たちが生きていく生き方はこういう道筋だよと、一本筋を通してくれたと思います。日本は、被災と復興を繰り返してきているから、日本人の心の中、精神に、焼け野原みたいところから何くそと復興する、レジリエンス文化というか、世代を超えて

受け継がれるものがあるのだろうかと思っ  
ています。

— 国内外に減災文化が広がっていくといいですね。では、この先、さらに取り組んでいくこととして、何があれば教えてください。

### 火山マイスター制度が拡大中

川：火山マイスターは、洞爺湖有珠火山で最初にできて、その次に、御嶽山でもできました。御嶽山も火山地域なので、火山マイスターが必要だと思いますと話したら、本当に立ち上がったんです。今、他の火山地域でも検討しているところがあります。コストリカの話もさっきありましたが、火山マイスターのネットワークが広がるようにしています。ですので、NIPPON 防災資産もそういうネットワークができていくといいですね。私たちの火山マイスターネットワークでも、いろいろな話題提供ができますし、経験談を話してくれたり、困ったことを相談できる人材を紹介していただけるようになると思います。

加：そうですね。「深化を考える会」が資産のある現地で開催されるとか、それこそ日本の資産として活用できる仕組みができていくといいと思います。

— お話をもとに、自分事化のヒントをまとめてみます。今日は本当にありがとうございました！

## Check



ジオパーク推進協議会にある三松三朗さん(故人)の等身大ボード。三松正夫さんの時代からの精神が大切にされている。



地域の産品と大地の関わりを紹介するジオパーク推進協議会作成のイラストカード。丁寧に作り込まれていて、伝えることを大切にしていることが感じられる。

## 自分事化のヒント

自分じゃない人の  
ことを想う人がいる

景色の向こうにある  
物語を楽しむ

命を守ることを  
一番に伝える

多様で寛容な  
コミュニティがある

伝えることを  
大切にす

とにかく、皆さん楽しんでました。ジオパークを舞台に、事象の背景にあるものを面白がり、「火山好きだけで集まっているわけではない」とおっしゃるように、地域の魅力、災害のことを広い世代に、様々な切り口で伝えられることが大きな特徴で、それでいて、命の大切さをしっかり伝える芯があることが分かりました。

そして、その心には、おそらくは昭和新山の誕生以前から、災害を経験してきた地域の中にある「自分じゃない人のことを想う」ことがあり、今は、観光を中心とした産業とも結びついて「減災文化」が顕在化しているようでした。

災害リスク自分事化のヒントは、上にあげたもの以外にもいくつもあったと思いますが、それぞれが独立した単純なものではなく、互いに関係しあっていることも感じられました。

Check

洞爺湖有珠山  
ジオパークHP

